

豊かな河北潟に
夢のある干拓地に

NPO法人河北潟湖沼研究所通信

かほくがた



エコプロ2018でP R販売

2013年より毎年出展しています環境展示会「エコプロ」、2018年は、12月6日(木)～8日(土)に東京ビックサイトにて開催されました。東第5ホールの中寄りのブースに配置されましたが、人通りの少ない場所でしたので、声掛けに苦労しました。河北潟流域の取り組みについて紹介するとともに、「七豊米」や「生きもの元気米」の販売をしました。保全活動としての目的や、生きもの元気米の田んぼの生きもの調査の結果、農薬の問題にふれながら、生きもの元気米のすそ野が広がるよう積極的にP Rしました。

今回の展示テーマは「河北潟流域ツアー」です。河北潟には魅力ある自然が残されています。農地であることで開発から守られ、野生生物の貴重な生息環境となっている側面もあります。当研究所では、自然観察、農業体験、保全活動がくみあわせる「河北潟流域ツアー」を今後すすめていくことを検討しており、モニターツアーも実施します。都会の方が楽しめること、上流域と下流域の住民交流をすすめること、流域全体を視野に入れた保全活動を展開するなどのねらいがあります。ぜひツアーに参加いただけたらと思います。(文：川原奈苗)

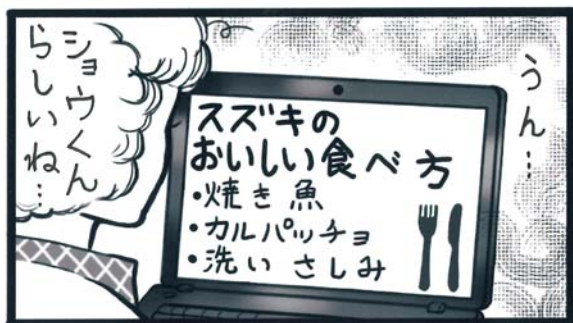
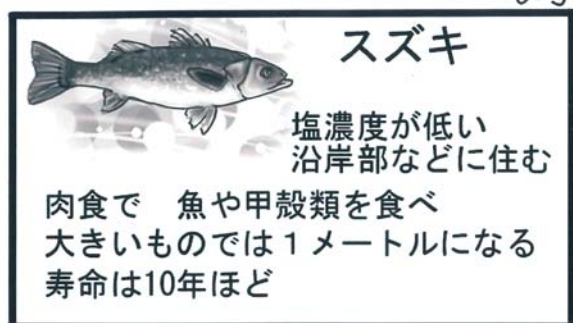
CONTENTS

エコプロ2018でP R販売	1p
河北潟の仲間たち・51 「スズキ」	2p
森下川流域の 自然と人のつながりを考えよう	3p
実行委員会形式となった 河北潟クリーン作戦	4p
河北潟流域シンポジウム報告	6p
三方五湖、中池見湿地の視察	7p
お知らせ・活動報告	8p

第51回 スズキ

カコちゃん
ショウくん かほくがたナルドレン

ひ3



スズキは、外海と接する湾口や河口域で冬に産卵する本来は海水魚ですが、春から秋は内湾や河川を遡上する回遊魚です。干拓前の河北潟にはたくさん生息していたようで、漁も行われており地域にとって重要な魚介でした。

干拓後に淡水化された現在の河北潟でも、スズキは普通にみられる魚です。本湖だけでなく河北潟でも一番海から離れている北の端にある、かほく市の農業排水路などでも姿を見ることができます。防潮水門を飛び越えて、さらに排水路の樋門をくぐって遡っていることになります。結構たくましい魚です。

河北潟でカヌーボートをしている人からは、良くこの魚が跳ねてボートにあたったり顔面を直撃されたりする話を聞きます。大野川の防潮水門の海側にはとても多く生息していて、ゴムボートで調査していると、そこいら中で結構大型の個体が跳ねるのがみられます。あたりでは、ウェットスーツを着た人たちが水の中に入ってルアー釣りをしています。シーバスと呼ばれ、引きが強いことから好まれて、スポーツフィッシングの対象となっています。

出世魚で、河北潟の周辺では、稚魚をハネと呼んでいます。現在は食べる人はいなくなりましたが、煮付けにしたりして食べられていました。大きな個体は、刺身にしても食べられていました。肉質は良く、たいへん美味しい魚です。七尾湾のスズキは刺身として河北潟周辺のスーパーにも出回っていますが、大野川や河北潟にまだ豊富にいるこの魚が、地域の食用とされていないのはとても残念です。河北潟の水が汚いという固定観念が強く、食べる対象としてみられて

いないのですが、富栄養的であることと汚染されていることとは違うことであり、また、河北潟ではアオコの発生も起こらないので、スズキがおいしいといわれる夏場でも匂いもきつくないと思われます。将来、食用魚としての利用も考え、汚いイメージが払拭されるように、流域の水を安全で良好なものに変えていく取り組みと合わせて進めていけたらと思っています。

タカミサギは、河北潟のスズキがおいしいことをよく知っています。何度も水中に飛び込んでまでスズキを捕まえるのは、単に腹を満たしたいだけではなく、おいしいものを食べたいという執念がさせているのかも。（文：高橋 久）

森下川流域の 自然と人のつながりを考えよう



開催日：2019年2月9日（土） 会場：薬師谷公民館1階 和室

主催：NPO法人河北潟湖沼研究所 協力：一般財団法人エコロジカル・デモクラシー財団

河北潟から森下川を遡ったところにある森本地区は、近年、金沢テクノパークや、北陸高速道路、山側環状道路、国道304号が複雑につながった金沢森本インターチェンジ、そして北陸新幹線など、土木工事と建築物により大きく景観が変わった地域です。しかし、森下川や深谷川、上流域の棚田など、昔からの優れた自然環境もたくさん残っているところです。

この地域の人の暮らしと自然との関係は、どのようなものであったのか、そしてどう変わってきたのか、これからどのような人と自然との関係が求められるのか、地域の人たちと地域外の人たちが一緒になってみんなで考えました。

最初に今回のワークショップの目的について河北潟湖沼研究所の高橋理事長より、昔の森本のお話をうかがい、昔のことを思い出しながら昔のよかったこと今は無くなってしまったこと、一方で今の方がよくなったことなどを、自然と人とのつながりの観点から、皆さんと考えていきたいといった挨拶がありました。

その後、昔から森下川流域に住んでいる亀田健治さんより、森下川と地域の変遷についてお話

をうかがいました。森下川は昔は蛇籠で護岸されていたため、魚がたくさん住んでいたこと、よく水が浸かるところは遊水地とされていたが、ほ場整備で田んぼになったこと、川が土砂を運び水が溢れることで肥沃な土地ができ、おいしい自然薯が穫れたこと、コイ、フナ、ウグイ、ナマズ、ウナギまでも獲れたことを教えていただきました。冬になると河北潟まで寒ブナを求めていったこと、青年団では毎年舟に乗って河北潟まで出たこと、しかし、だんだんと背が曲がった魚がかかるようになり、ついには釣り大会が中止になったという残念なお話もありました。

後半は、東京から来られたエコロジカル・デモクラシー財団の土肥真人さんから、自然を治すと社会が治り、社会が治ると自然が治るといった関係性があることなど、エコロジカルデモクラシーという考え方についてのとてもわかりやすい説明がありました。その後、同じエコロジカル・デモクラシー財団の吉田祐記さんの進行で4班に分かれて話し合いを行いました。話し合いでは、自然と社会の関係を考えるための新しいツールであるエコデモ発見シートを使って、楽しく地域のつながりを発見していきました。

29名の参加者1人1人がエコデモシートにたくさんのお話を書いていました。最後に発表があり、水生植物の公園があったら、自然から学ぶことが多いので教育の観点をもっと持って取り組んだら、河北潟を食を通じて理解できるのでは、未来像の共有が大切などの意見が出されました。



実行委員会形式となった河北潟クリーン作戦

高橋 久（第23～25回 河北潟クリーン作戦実行委員会事務局長）

2016年11月15日に開催された「今後の河北潟クリーン作戦について考える会議」において、今後の河北潟クリーン作戦は河北潟自然再生協議会の主催から実行委員会の主催に代えて継続実行することが決定され、2017年1月17日に開かれた第1回河北潟クリーン作戦実行委員会において実行委員会がスタートしました。2月21日の第2回実行委員会では規約の採択と役員を選出を行い、4月16日に第23回河北潟クリーン作戦を実施することができました。

こうした変更が行われた背景には、河北潟クリーン作戦が河北潟自然再生協議会が主催を受け継いだ時点（第9回）から見ると参加者が2倍程度となっていること、それに対して河北潟自然再生協議会の組織的基盤が脆弱であること、メンバーが高齢化していることから危険を伴う大規模なイベントであるクリーン作戦の主催を続けることが困難となってきたこと、今後の継続のためには自治体を加えた実施体制の確立（協力でなく共催または自治体の主催）が必要となっていたことがあります。



今後の河北潟クリーン作戦を考える会議（2016年11月）



そこで、当初は自治体が主催者として加わる形での新しい実施体制を展望し、以前より非公式に4市町との協議を行ってきましたが、十分な回答が得られなかったため、2016年5月に4市町を代表する河北潟水質浄化連絡協議会と河北潟環境対策期成同盟会に対して質問状を提出しました。質問状は、1）これまでの河北潟クリーン作戦の取り組みに鑑み取り組みを継続すべきと考えるか、2）4市町として河北潟クリーン作戦の継続のために取り組めること、3）4市町が主催を引き受けることは可能か、または行政機関が共催とする体制は可能か、4）今後のクリーン作戦の実施体制を考えるための検討会等の話し合いの場に参加できるかを問うものでした。

これに対しての回答は、これまでの活動は評価するが、あくまで住民による自主的な活動と認識しており、市町より継続の必要性に言及するものではなく、継続が困難な場合は無理に継続を要請するものではない、4市町としては協力という形で連携はするが、主催を引き受けることや話し合いの場に参加することはないという回答でした。河

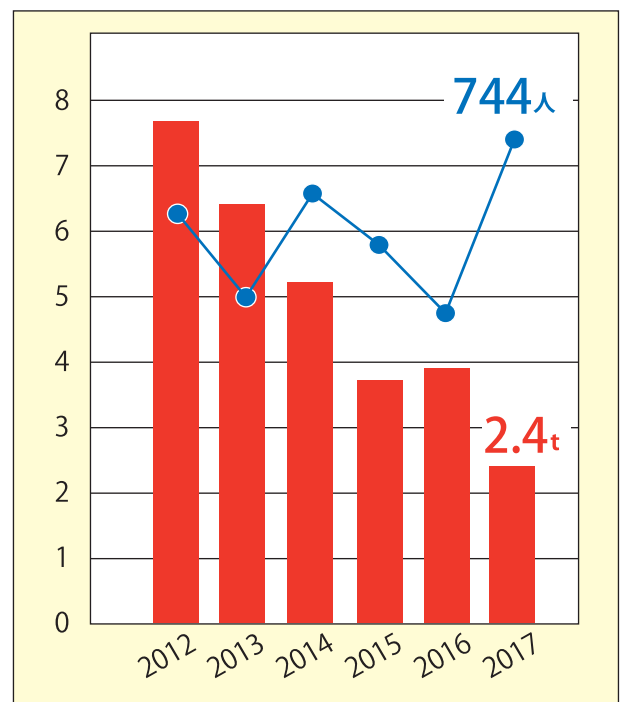


図. 回収したゴミ量と参加人数の推移



行政を交えた打ち合わせ会（2017年3月）



地点6に集められたゴミ（2017年4月）

北潟クリーン作戦は、もともと自治体からの要請に応じて市民団体が集まって始めたものであり、当初は金沢市に事務局があった経緯からすると、回答は納得できないことを含むものでしたが、回答は回答として受け止め、今後は4市町を協力機関として考え、別の実行委員会の体制をつくることとしました。

拠り所となるのは、これまで河北潟クリーン作戦を支えてきた参加団体です。それぞれの団体に実行委員会への参加を呼びかけました。ありがたいことに河北潟干拓土地改良区と河北潟沿岸土地改良区に参加いただけることとなり、実行委員会を発足することができました。

そのような経緯により、第23回河北潟クリーン作戦は実行委員会主催で無事実施することができましたが、財源の問題は解決していないことから、2018年第24回クリーン作戦にあたっては、4市町への補助金の増額申請をするとともに、地元企業からの協賛金を集めることとしました。

企業協賛を受けて開催した第24回河北潟クリーン作戦（2018年）

市町からは増額はできない旨の返事があり、これ以上渋る行政を相手にするより、企業協賛を拡げること注力しようということになりました。結果として17企業・団体より25万円の協賛金を賜り、従前から受けている4市町からの合計9万円の補助金と合わせて、事務局人件費を含む予算を組む基盤ができました。また、農事組合法人Oneよりイベント収益基金8,728円の寄付をいただき、チラシの他にポスターの作成もでき、流域まで呼びかけ対象を広げることができました。残念ながら実施当日は強風と雨で全体での実施は中止せざるを得ませんでした。有志により一部実施することができました。

この体制は第25回実行委委員会にも引き継がれており、24回を上回る規模で準備が進んでいます。その後、4市町との協力体制も順調で、当日の運営に関しては職員の派遣をいただき、集めたゴミの処理も担当いただいています。一時は、継続困難かと思われましたが、結果的にはより強固な実施体制をつくることができました。

河北潟流域シンポジウム

河北潟と流域の環境保全と賢明な利用に ラムサール条約は活用できるか

主催／NPO法人河北潟湖沼研究所 協力／ラムサール・ネットワーク日本



2019年3月17日に金沢市において、河北潟におけるラムサール条約登録を推進することが、流域の環境保全と賢明な利用の促進につながる可能性について探るシンポジウムがおこなわれました。

河北潟をラムサール条約に登録しようという動きは、2002年に河北潟自然再生協議会が設立された際に重要課題として取り上げられその後持続的に取り組まれています、本格的な取り組みには至っていません。本日のシンポジウムを契機として、登録への取り組みを再び強めていきたいと思っています。



河北潟湖沼研究所
高橋 久

河北潟湖沼研究所の新しいビジョンでは、河北潟を本来の姿である汽水湖に戻すことを前提に、河北潟の水を生み出す流域全体を一から見直す新しい流域管理の形をつくることを提案しています。



河北潟湖沼研究所
永坂正夫さん

ラムサール登録湿地に登録するということは、日本政府が、その湿地の生態学的特徴を維持するために、政府が必要な手段をとるという公約を表明することです。その上で重要なことは、登録された湿地が、持続的に利・活用できるように、地域の住民・NGOが、行政と協力して管理していくことです。だから、ラムサール条約は、NGO、地域住民、先住民との関わりを大事にしているのです。



ラムサール・ネット
ワーク日本
後藤尚味さん

渡良瀬遊水地の条約登録が実現した要因としては、1. 署名活動によるアピールと自治体の姿勢の変化、2. ラムサール議連のサポート、3. 渡良瀬遊水地湿地保全・再生基本計画の策定、4. 国交省からの環境省に対する河川法担保の提案、5. 環境省・国交省による地域住民説明会の開催、6. 地元議会の陳情・請願の採択、7. 治水団体と自然保護団体の連携、といったことが挙げられます。



ラムサール・ネット
ワーク日本
浅野正富さん

河北潟は、ラムサール条約登録基準5：定期的に2万羽以上の水鳥を支えるに該当しており、また、基準6：種の個体数の1%を定期的に支えているにコガモが該当しています。また、環境省の重要な湿地モニタリングサイト1000のうち15番目にガンカモ類が多く、潜在的なラムサール登録湿地の条件に当てはまります。



日本野鳥の会
田尻浩伸さん

かほく海岸では、古くから多数のシギ・チドリ類が観察されています。春には越冬していたミユビシギとハマシギの群が徐々に夏羽に変化していくのが観察でき、トウネン、キアシシギ、チュウシャクシギなども加わって、波打ち際は賑わいます。8月に入るとトウネンやミユビシギの成鳥が渡来し始めます。9月には、種類、羽数共最大値となります。



山階鳥類研究所協力調
査員
中川富男さん

河北潟のカモ類とコハクチョウの個体数のカウントを続けています。近年ではカモ類は1万7千～2万8千羽で、このうちコガモとマガモが最も多く、コハクチョウは138～534羽を数えています。



日本野鳥の会 石川
代表 中村正男さん

河北潟での野鳥保護の取り組みは、1975年の「カモ網罟禁止」と「鳥獣保護区の指定」を県に要望したことから始まり、1996年にはレンコン田の防鳥網による犠牲野鳥の保護活動、1996年からはミサゴの調査をおこなっています。



森の都愛鳥会顧問
本間勝美さん

ラムサール登録を進めるためには、登録条件を満たすとともに地元の合意があることが必要です。河北潟では、登録条件が満たされる可能性があることから、今後の登録を進める上での課題は、地元でのラムサール登録への理解を広めること、と

りわけ農家さんが登録を受け入れることが必要です。また、地元の登録に向けた熱気が大事です。河北潟のワイズユースを営農と合致して進めることができれば可能性が広がるのではないのでしょうか。（文：高橋 久）

河北潟湖沼研究所では、河北潟の将来ビジョンとして海水の再導入による環境復元を提案しています。三方五湖は、様々な塩分濃度を持つ複数の湖から構成されており、河北潟の将来の姿を考える上で参考にすべき湖沼のひとつです。近くには、三方五湖と同じくラムサール条約登録湿地である中池見湿地があり、湿地の賢明な利用をめざして活動団体に取り組んでいます。そこで、当研究所の研究員による三方五湖と中池見湿地の視察を行いました。

視察の報告の前に三方五湖と中池見湿地について簡単に説明します。

三方五湖は、福井県美浜町と同県若狭町の11km²内に位置する5つの湖の総称です。2005年にラムサール条約指定湿地に登録されました。日向湖を除く4つの湖は水門により遮断されることなく（人工の嵯峨隧道を除く）すべてつながっておりますが、塩分濃度はそれぞれ異なっています。

日向湖は、かつては淡水湖でしたが人工開削により日本海とつながっているために現在の水質は海水とほぼ同じです。久々子湖は、早瀬川で海とつながっており海水の1/3くらいの塩分濃度です。久々子湖と水月湖は、浦見川でつながっておりやや塩分が入っている汽水湖となっています。また水月湖は水深が34mもあり、上部は淡水で下部は無酸素の汽水となっており、生物がほとんど住んでいません。菅湖は、水月湖とつながっている部分が広いため、塩分濃度は水月湖とほとんど同じです。三方湖は、菅湖と細い水路でつながっていますが、海水は入っておらず淡水湖となっています。（参考：環境省「日本の汽水湖」）

中池見湿地は、福井県敦賀市にある面積約25haの低湿地で、敦賀断層の西側が沈降したことにより袋状の埋積谷ができ、そこに湿原が発達したも



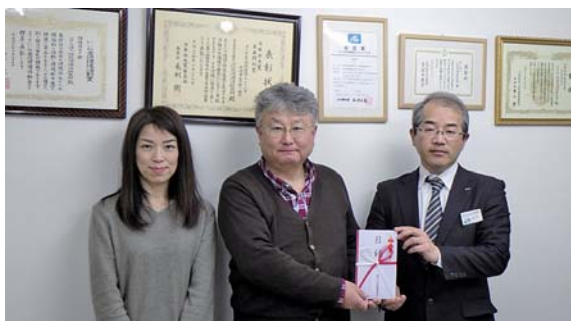
のです。数十mにも及ぶ泥炭層があり、泥炭湿地と呼ばれています。この泥炭に、過去約10万年の気候変動や植生変化の情報がつまっています。2012年にラムサール条約登録湿地となりました。（参考：敦賀市「敦賀の自然（中池見湿地）」）

視察は2019年3月22日に4名で行いました。三方五湖では、福井県里山里海湖研究所・宮本康研究員より、三方五湖のなりわいと自然環境のつながりについて、また、各湖による塩分濃度の違いや生物の違いについて説明をいただきました。初めに三方五湖周辺での水産資源を利用した食事を紹介いただき、このように生活に自然資源が利用されていることから、周辺住民の方にも、自然を守って行かなければならないという意識が根付いているという説明がありました。また、現在の三方五湖の護岸はコンクリートが多いが、ここは自然災害の多い土地であり、防災のために現在のようになっていることが説明されました。そして三方五湖では水の流れを遮るような堰や水門はないが、これは湖周辺のたくさんの村々が湖を利用した漁をしていたため、堰き止めにより、誰かが漁をすることができなくなってしまうことを避けるために、各湖がつながっている状態になっているそうです。長く湖を生業として利用してきた人々の歴史が現在の姿につながっているということでした。歴史という視点を入れると、合意形成が早く進んでいき、行政との話もしやすくなる、地域の人の思いを大事にすることも大切であるとの説明をいただきました。

中池見湿では、NPO中池見ねつとの上野山雅子氏より、現地を案内いただきながら、現在の状況や池が広がってきている問題点、一般の参加者を増やすための工夫などについてお話を伺いました。

あいおいニッセイ同和損害保険株式会社様より・寄付金贈呈式

昨年度に引き続き、あいおいニッセイ同和損害保険株式会社様より、「eco保険証券・Web約款選択件数に応じた寄付活動」に基づく寄付金を賜りました。2019年2月22日に寄付金の贈呈式がおこなわれました。活動の原資としてご寄付を活用させていただきます。



田んぼの生物多様性向上10年プロジェクト全国集会in東京

2月24日、これまでの活動を振り返るとともに、田んぼの生物多様性向上と消費行動について各地から活動報告がおこなわれ、当研究所からも理事長の高橋より、生物多様性を念頭においた「生きもの元気米」の経緯や、生産者や消費者の反応について報告されました。パネルディスカッションでは、2020年から次の10年にむけて議論が交わされました。



未来につなぐふるさと基金報告会

3月7日、キヤノンマーケティングジャパン港南事業所にて行われた「未来につなぐふるさと基金」活動報告会に参加してきました。未来につなぐふるさと基金は、パブリックリソース財団とキヤノンマーケティングジャパンが協働運営しているもので、2017年度、2018年度と活動を助成いただきました。報告会では全国から10団体が集まり、各地の活動について報告がされました。翌8日にはそのうちの1団体、神奈川県NPO法人、小網代野外活動調整会議の活動現場視察会にも参加しました。現場の小網代の森には、中を流れる小さな浦の川があり、それにそって森林、湿地、干潟、海までが連続して

残されています。流域としてひとまとまりで保全活動をされていて、それぞれの場所の特徴をみながら、活動内容をお聞きすることができました。「流域」の保全活動について学ぶことができる貴重な場でした。

「伝える動画の作り方」を学ぶワークショップの実施

3月17日、グリーンピース・ジャパンの方々を講師にお迎えしてワークショップを実施しました。ネオニコチノイド系農薬の問題を例題として、動画制作の要となるストーリーテリングの手法について学びました。動画で有効なストーリーを作るには、ターゲットを詳細に設定し、動画で伝えたい内容（問題）そのものだけでなく、それらを取り巻く社会の枠組みについても考え、動画を組み立てていく必要があることがわかりました。これから河北潟流域のPR動画を作っていくにあたり、とても勉強になったワークショップでした。



プロモーションビデオ作成中

地球環境基金の助成を受けて、河北潟の自然を紹介するプロモーションビデオの制作を進めています。河北潟湖沼研究所のスタッフだけでは技術的に困難なので、プロの力を借りて制作しています。この日もビデオ制作会社のカメラマンと河北潟の冬の風景を撮りに行きました。撮影のコツを教えてもらいながら撮影しました。



編集後記

ビデオの撮影は難しいもので、プロの方でもなかなか撮れないものです。河北潟の美しい自然に焦点をあてつつNPOならではの良さが出せたらいいですが、スタッフで悩みながら作成をすすめています。(N)